

◆興福寺園地・宝掌院の調査 —第303-2次・第303-10次

1. 興福寺園地の調査

はじめに

本調査地は、現・三条通りと小西通りの交差点から北に85m入った小西通り東側に位置し、東西に長い敷地である。左京三条六坊十二・十三坪にあたる。十三～十六坪の4坪は、奈良時代には興福寺西門外の旧境内地西辺で、興福寺の菓園・園地が置かれていたとされる。調査地内には東六坊坊間東小路や中近世の町屋遺構などが想定できた。1998年の第293-6次調査では当調査地の南方約12mの地点を調査し、小穴・土坑・井戸・溝など中世の遺構を検出している。今回は店舗新築に伴う調査で、第293-6次調査と同様な遺構の存在を想定し、東西43m、南北1.7m、約73m²の調査区を設定した。調査期間は1999年4月19日から4月29日。

検出遺構

調査地は西下がり緩斜面をなす。現地表の標高は当端で81.75m、西端で80.45mである。基本層序は上から最

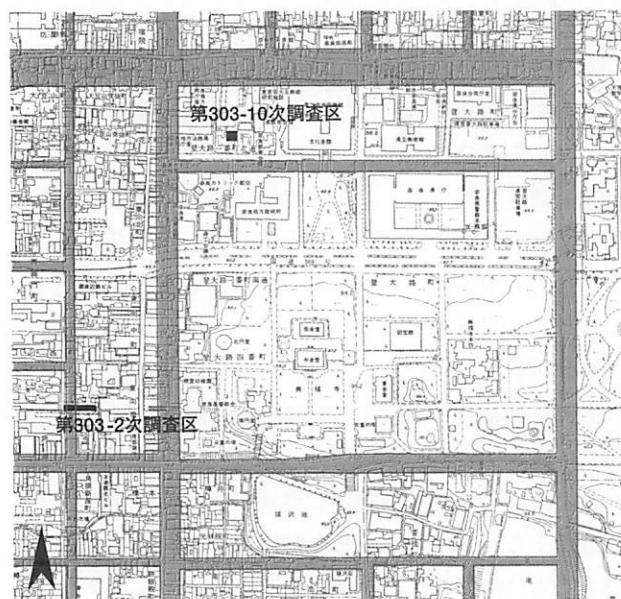


図42 調査区位置図 1:10000

近の置き土、近代の攪乱層、土器片の多い包含層があり、現地表下0.85～1.3mで地山に達する。地山は東で高く(80.65m)、2.5%勾配で西に下がる緩斜面をなす。地山は西端から7mまでが青灰粘土混砂質土、それ以东ではその上に乗るバラス混黄灰粘質土である。遺構は遺物包含層を除去した地山面で検出し、中世以降の柱穴・土坑・井戸が多い。以下、主要なもののみ記述する。

SD7705 調査区西端から東へ6mの地点を肩とする、西に下がる落ちである。第293-6次調査地でも同様な斜面を検出しているが、遺構番号を与えていない。当調査地のSD7705の肩は南で東に振れるが、その延長線上に第293-6次調査区の傾斜の肩があることから、両者は一連の遺構で、大規模な溝となる可能性が高い。幅は6m以上、深さ60cmである。下半に灰黒粘土、上半に暗灰粘質土が堆積する。なお第293-6次調査区ではSD7705の底で、幅1.5m以上、深さ35cmの溝SD7450を検出したが、当調査区には及んでいない。SD7450からは14～15世紀の遺物が出土しており、SD7705はそれ以降である。

SD7706 SD7705に流れ込む東西溝で、SD7705の東斜面に掘り込んである。調査区南壁沿いに長さ3.2m分検出し、南肩は調査区外に出る。幅は35cm以上、深さ15cm。

SA7707・7708 小柱穴が並ぶ。建物の可能性はあるが、堀として処理する。SA7707は柱穴径30cmで柱間2m、SA7708はと柱穴径20cmで柱間1.1mと小規模である。中世以降の遺構。他にも小柱穴多数があるがまとまらない。

出土遺物

中近世の土器が6箱、平安時代の軒丸瓦2点、鎌倉時代の軒平瓦1点が出土した。

まとめ

奈良時代の遺構、とくに東六坊坊間東小路に関わる遺構は今回も検出できなかった。

既知の東四坊大路心座標(X = -146,865.00、Y = -16,457.20)を用い、当地周辺における条坊の振れを0°

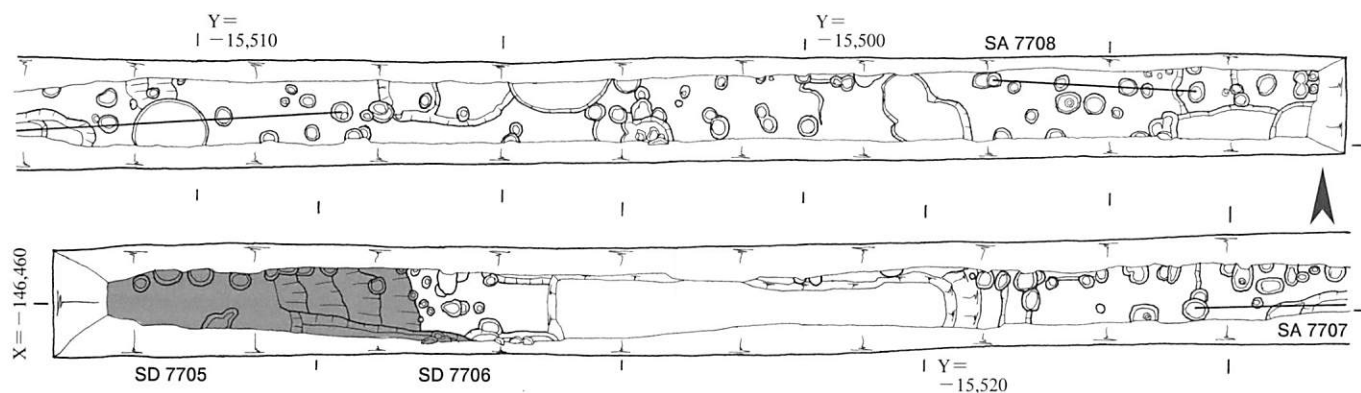


図43 第303-2次調査遺構平面図 1:500

09' 11"と仮定して、当調査地における坊間東小路の心を求めると、 $X = -146,460.00$ 、 $Y = -15,527.48$ (①)となり、調査区西端から東へ6.9mの位置となる。路幅を側溝心々で20尺とすれば、東側溝位置には遺構が無く、西側溝位置はSD7705の東斜面下端に当たる。第293-6次調査の報告では、ほぼこれと同じ計算を行い、SD7450が古代の西側溝を踏襲した中世の溝である可能性を指摘しつつも、小西通りが遺存地割に由来するなら、SD7450が東側溝の後裔となる可能性も指摘した。残念ながら当調査でも新たな知見は得られなかったが、別の数値を用いた計算を試みた。

東大寺転害門前東七坊大路心座標 ($X = -145,480.20$ 、 $Y = -14,872.96$)を用い、条坊の振れを $0^\circ 09' 11''$ とすれば、東小路心の $Y = -15,535.22$ (②)となり、調査区西端から85cm、条坊の振れを $0^\circ 06' 43''$ とすれば、東小路心の $Y = -15,535.92$ (③)となり、調査区西端から155cmの位置となる。いずれの場合も、東側溝がSD7705の底の位置に来る。東大寺転害門前を起点にすれば、条坊の振れを $0^\circ 20'$ という外京域では過大な数値を用いても、東小路心の $Y = -15,532.71$ (④)となり、①より5.23mも西に寄るのである。付近の遺存地割のあり方からすれば、①よりも②③の方が妥当、すなわち小西通りを東六坊坊間東小路の後裔と見た方が良い。もちろん近辺の今後の調査で検証する必要があるのは言うまでもない。なお、条坊関係のデータは『興福寺 第1期境内整備事業にともなう発掘調査概報Ⅱ』を参照した。(岩永省三)

2. 興福寺宝掌院跡の調査

はじめに

本調査地は興福寺旧境内北西隅の左京三条七坊一坪にあたる。台地の端に位置し、西側は比高3m余りの崖となる。1708年(宝永5)の「興福寺伽藍春日社境内絵図」によると、近世には興福寺塔頭宝掌院の敷地で、今回は同絵図に描かれた宝掌院本堂の裏手に相当する部分の東

西6.5m、南北4.5mの約29m²を調査した。

検出遺構と出土遺物

基本層序は表土、暗褐色土、茶褐色粘質土を経て、現地表面から40~60cmで堅い礫混じり橙褐色粘質土の地山に達する。遺構は基本的に地山面(標高88.3~88.4m)で検出した。調査期間は2000年2月14日から2月24日。

SE7770は北西隅で検出した直径約2.1mの素掘りの井戸。遺構面から2.5m余り掘り下げたが、崩落の危険のため完掘は断念した。井戸の周囲には直径は30cm程度、深さ30~40cmの小穴が点在するがまとまらない。石列SX7760は包含層上で検出したもので、近世以降の庭に伴う施設か。古代に関わる遺構はない。

出土した瓦塼類には軒丸瓦5点(中世巴3点・近世巴1点・型式不明1点)、軒平瓦2点(近世)の他、丸瓦21点5.1kg、平瓦98点16.6kg、塼1点0.9kgがある。土器は中近世のかわらけが遺物整理箱2箱分、また北宋の1023年初鑄の天聖元宝1点が出土した。ほとんどは遺物包含層からの出土である。東に隣接する清浄院の井戸からは荒神祓に関わる墨書土器が多量に出土している(奈良県立橿原考古学研究所『奈良市興福寺清浄院跡発掘調査概報』1991年)が、今回は完掘できなかったこともあり、SE7770に顕著な遺物はない。

(渡辺晃宏)

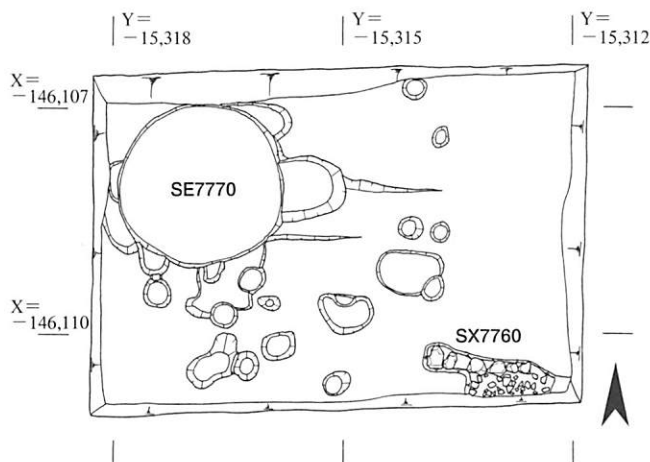


図44 第303-10次調査遺構平面図 1:100